

第Ⅷ章 妊産婦の心理についての質問紙法による調査

研究第8部 牛 島 義 友
湯 川 礼 子

1. 目 的

妊娠から出産にかけての心理的变化は母親になるという役割の変化と同時に母性意識を育てていく上で非常に重要な時期であるといえる。最近では母性愛の欠如が話題になったり、子どもの人数が少ないので子どもにべったりの過保護な母親もあり社会状況の推移に伴って価値観、人生観も変化し、それが育児に影響を与えることは否定できない。

昨年度は母性意識の成立について妊産婦に面接質問して20年前と比較したが、今年度は昨年の調査結果を基に質問紙を作製し広範な地域にわたって数多くの資料を集め都鄙別の差を検討する。

また近來母乳栄養が減少しているのもその原因、背景となっているものを究明し母乳栄養の必要を再確認するのが本研究の目的である。

2. 方 法

昨年の面接による調査は自由回答形式なので回答をいくつかのカテゴリーに分類して集計を行なった。その結果を基に妊婦及び産婦別に質問紙を作製し協力を申し出てくれた保健所を通じて妊産婦に配布してもらった。回収は返信用の封筒を同封しておき直接当研究所宛に郵送してもらった形式をとった。保健所によっては妊産婦が保健所に来所の際にその場で記入してもらい一括して保健所から送付してくれた所もあり保健所の好意的な協力を得て60%を上回る回収率であった。

1) 調査対象

第1表に示す19保健所（1病院を含む）の管轄下の妊婦及び産婦で北は北海道から南は九州まで広範な地域にわたっている。

妊婦は母子健康手帳交付の際、或いは妊婦の保健指導、妊婦のための母親教室の際等に保健婦により配布してもらった。主に妊娠中期、後期の妊婦960名である。

産婦は乳児検診を受けるために保健所に来所した際が主で、その他家庭訪問や立川病院の場合は分娩のため入

第1表 保健所別人数

保 健 所 名	妊 婦	産 婦	計
東京都 赤坂保健所	—	9	9
東京都 小金井保健所	55	48	103
東京都 国立立川病院	24	28	52
北海道 札幌南保健所	32	41	73
北海道 標茶保健所	34	92	126
埼玉県 行田保健所	28	37	65
埼玉県 秩父保健所	28	32	60
神奈川県 秦野保健所	104	131	235
神奈川県 大和保健所	20	25	45
神奈川県 小田原保健所	47	36	83
山梨県 石和保健所	29	—	29
長野県 伊那保健所	49	50	99
福井県 小浜保健所	57	—	57
岡山県 成羽保健所	32	30	62
広島県 竹原保健所	29	28	57
徳島県 鳴門保健所	33	45	78
香川県 高松保健所	235	87	322
熊本県 中央保健所	99	99	198
鹿児島県 隼人保健所	25	11	36
合 計	960	829	1,789

院中の産婦等で計829名である。乳児の月令は生後数日のものから12か月にわたっているが5か月までが70%以上を占める乳児を持つ母親である。

2) 調査期間

昭和46年12月から昭和47年3月にかけて調査用紙を配布し3月末日までに回収した。

3. 結果と考察

1) 地域別の比較

都鄙別的人数は第2表の如くなり地域を東京、市部、郡部、地域不明に分けた。同一保健所管内でも管轄が市部、郡部が含まれることが多いので保健所別の集計は行なわず上記の分類とした。第3表以下では地域不明の欄は除外し、東京（赤坂、小金井の2保健所及び立川病

第2表 地域別人数

	東京	市部	郡部	地域不明	計
妊 婦	79	482	364	35	960
産 婦	85	381	311	52	829
計	164	863	675	87	1,789

院)、市部、郡部、計(地域不明をも含む合計)を表示していくこととする。なお妊婦、産婦を合計したものの数値である。また右端の欄に昨年の面接調査の結果を並記しておく。昨年の調査は大都市の一病院に限られてはいるが、質問紙法と異りかなり信頼できる数値といえることができる。

調査対象の年齢は第3表の如く21才から30才が殆んどで地域による差はない。また学歴をみると郡部では中学卒が半数近い43%を占めているが都会になるほど学歴が高くなっている。

第3表 被調査者年齢(%)

	東京	市部	郡部	計	面 接
～ 20才		2.1	1.8	1.8	
21才 ～ 25才	43.9	49.1	44.2	46.1	18.0
26才 ～ 30才	45.1	36.6	40.3	38.9	55.3
31才 ～ 35才	6.7	10.2	12.0	11.2	22.7
36才 ～ 40才	3.1	1.3	1.2	1.4	3.3
41才 ～	0.6	0.2	0.1	0.2	0.7
無 答	0.6	0.5	0.4	0.4	

第4表 被調査者学歴(%)

	東京	市部	郡部	計	面 接
中 学 校 卒	12.8	26.7	43.3	32.4	6.7
高 校 卒	64.0	60.6	49.0	56.0	35.3
短 大 卒	14.1	8.3	4.0	6.9	24.7
大 学 卒	7.9	2.3	1.0	2.3	31.3
無 答	1.2	2.1	2.7	2.4	2.0

夫の職業は東京、市部とも会社員が第1位、次いで公務員、商業の順になっているが、郡部では農漁業が1位、会社員、公務員の順となっている。

以上のように対象を比較してみると年齢は大差なく、学歴、職業の点で都鄙の特徴を表わしているといえよう。

次に一つ一つの項目について比較検討していくこととする。

(1) 妊娠は当然だと思っていたか

結婚をすれば妊娠するのは当然であると思ひ期待しているかどうかをたずねてみると80%前後の人たちは当然

第5表 妊娠は当然だと思っていたか(%)

	東京	市部	郡部	計	面 接
は い	76.2	83.3	84.8	83.6	60.0
い い え	22.6	13.3	11.4	13.2	31.0
無 答	1.2	3.4	3.8	3.2	9.0

だと思っている。妊娠を意外だと思った人にその理由を質問すると長い間できなかつたり、受胎調節をしていたので妊娠したことを意外に思っているようである。そして意外に思う人は都会になるほどいくらか多くなっている。昨年の愛育病院の面接調査では30%を越えている。これは一応計画的な出産を考えて受胎調節をしてはいるものの方法が充分でなく失敗している人が多いためとみてよかろう。

(2) 妊娠は避けたいと思ったか

前項では妊娠を当然だと思った人が大半であったが、妊娠を意外と思った人もあり、その中には妊娠は避けたいと考えていた人もある。昨年の面接調査では30%の人が妊娠を避けたいと思っていたが、この度の調査では都市、町村に拘わらず2割前後の人たちが妊娠を避けたいと思っている(第6表)。つぎに避けたいと思った理由をみると第7表の如くなる。質問紙の場合、一つの選択肢だけでなくいくつもしるしをつけているが延回答数に対する%を示した。(以下12表まで同様である)面接法は一つ挙げていることが多いので質問紙法と面接法の結果を比較する場合、一応この点を考慮しなければならない。初産婦の場合は「結婚当初のため」、経産婦の場合は「上の子と年齢が近すぎる」が第1の理由になっている。東京が「結婚当初のため」が多いようであるが東京の場合調査対象の8割を初産婦が占めているためである。また「住宅事情が悪いため」に出産を希望しないのは郡部ではほとんどなく都市の特徴といえよう。昭和47年の「厚生指標」によれば二子を持つ母の出産を希望しない理由の一つである「住居が狭いから」は21.5%に

第6表 妊娠は避けたいと思っていたか(%)

	東京	市部	郡部	計	面 接
は い	21.3	17.6	18.8	18.5	30.0
い い え	78.7	80.2	80.2	79.9	63.0
無 答		2.2	1.0	1.6	7.0

第7表 妊娠を避けたい理由(%)

	東京	市部	郡部	計	面接
経済上	21.4	18.2	17.8	17.8	6.3
住宅事情	9.5	3.6	0.8	3.7	—
結婚当初のため	23.9	22.4	13.9	19.8	31.2
すでに子どもがいるから	7.1	12.7	18.6	14.4	6.3
上の子と年齢が近すぎる	19.1	26.7	34.1	28.9	28.1
子ども嫌い	—	—	0.8	0.8	3.1
勉強職業続けたい	11.9	7.9	7.0	7.7	12.5
その他	7.1	7.3	2.3	5.1	12.5
無答	—	1.2	4.7	2.3	—

延回答数に対する比率

ものばっていて現在のわが国では出産と住居とは切り離せない関係にある。経済上の理由は昨年の面接調査では6%であったが今回の調査では東京は21%に達して、町村に比べ都会の方が生活程度や教育程度が高い上に子供に充分手をかけてやりたいとの気持ちの表われであろう。また数は少ないが「勉強や職業を続けたい」からという理由も東京は郡部の2倍近くになっている。郡部では親との同居が多く子どもの面倒をみてもらうこともできるし、職業が農業である場合育児をしながら家庭の職業が続けられるので出産により職業を捨てなくてよいのである。都会は核家族が多く保育所、特に乳児を預る保育所の数が充分でなく産休が終わったあとの子どもの処置を考え出産に二の足をふんでしまうのかもしれない。特に専門的な職業についている人は育児に忙殺されるよりも自分の能力を活かしたい気持ちが強いであろう。

次に妊娠を望んだ人たちにその理由をたずねたのが第8表である。地域による差はなく半数の人が家庭は「子どもがいるのが自然の姿」と答えている。面接調査の場合もどうして子どもが欲しさを質問すると子

第8表 妊娠を望む理由(%)

	東京	市部	郡部	計	面接
子どもが好き	16.9	18.6	17.8	17.8	11.6
もっと欲しい	11.3	15.5	22.3	17.9	27.5
子どもなくした流産したから	2.1	1.6	2.3	2.0	8.7
後継ぎ	2.8	3.5	8.4	5.2	2.9
子どもがいるのが自然の姿	58.5	52.7	42.0	49.1	13.0
その他	7.7	4.2	2.8	4.0	20.3
無答	0.7	3.9	4.4	4.0	15.9

延回答数に対する比率

どもが欲しい理由など改めて考えたことがなく結婚し家庭をもてば子どもがいるのが当然だし、ごく自然のことだと思うと答える人が多かった。経産婦の場合は一人っ子ではかわいそうだからもっと欲しいとか、違う性の子がほしいなどはっきりした出産理由を持つ人もあるが、初産婦の場合ははっきりした出産の理由を見出しにくい。

(3) 妊娠自覚期

妊娠したことに気づくのはほとんど3か月までであった。その時の感情をたずねたのが第9表である。都鄙による差はなく、「喜び」とその反面に「不安」を持つ人が殆んどのである。しかし妊娠を避けたいと思っていた人の中には「困惑」や「失望」を感じている人もあり、また「何も感じなかった」という人も少数ある。昨年の調査では何も感じない人は17%にのぼっており計画的な出産の場合は妊娠は当然のことであるから特に感傷をもつことはないであろう。

また否定的な感情の失望、困惑を合計すると昨年の面接では今回の2倍になっている。これは調査法による違いともいえ現在胎内にいる子に否定的な気持ちを抱くことに罪障感を感じるためかもしれないが昭和22年の調査でも2.7%であり、昨年の被調査者が特に計画的な出産を望んでいた人たちが多かったであろう。

しかし質問紙は多肢選択法のため一つの項目で選択肢一つに印をつけず、いくつもつけているので面接調査の方がより正確な感情と受取ってよいであろう。

第9表 妊娠自覚期の感情(%) 妊婦

	東京	市部	郡部	計	面接
喜び	56.0	59.5	56.8	58.0	50.0
不安	20.9	19.7	20.3	19.9	10.9
驚き	13.2	6.1	5.9	6.5	4.5
失望	—	0.2	0.5	0.4	3.6
困惑	5.5	6.5	5.6	6.0	10.0
何も感じない	2.2	4.2	8.0	5.7	15.5
その他	1.1	1.3	0.5	1.0	5.5
無答	1.1	2.5	2.4	2.5	—

延回答数に対する比率

次に妊婦に母親としての感情はいつ頃から感じたか、またその感情はどのようなものであるかを質問した。この質問は面接調査の際には一番答えにくい質問であり特に初産婦の場合には実感として感じる事が難しいようである。第10表をみてもまだ感じられないといっている人が東京では35%に達し郡部の2倍になっている。これは東京の調査対象が初産婦が多いためかもしれ

第10表 母として自覚した時期(妊婦)(%)

	東京	市部	郡部	計
まだ感じられない	35.4	23.4	17.0	22.2
妊娠と同時に	12.7	24.9	33.8	27.1
胎動を感じてから	48.1	43.6	39.6	42.4
臨月近くなってから	1.3	2.5	2.8	2.6
その他	2.5	3.1	3.0	2.9
無答	0	2.5	3.8	2.8

ない。妊娠とわかった時に母としての自覚を持った人は東京では12.7% 市部では24.9% 郡部では33.8%と漸次増加し町村の方が早くから自覚を持つようである。しかし半数近くの人はいわゆるつらい時期をすぎ胎動を感じると母としての自覚に目ざめてくる。

母親としての自覚を持つのは都会の人ほど遅いようであるが、その感情はどうか、内容を見ると責任感、喜び、母性愛とも同じような傾向といえる。妊娠した時にはただ単純に喜んでいたので胎児が大きくなり心音や胎動を感じたり胎動を感じなくなると責任感や母性愛を感じようになってくる。また7%前後の人はなお不安を残している。昨年の面接調査と比較すると緊張感が少なくなっていて単純に母性愛や喜びを感じている人が多く特に郡部にその傾向が強い。これは学歴が高いほど自分たちの生活を考え、喜びよりも母親になるとの緊張を強く感ずるのである。

第11表 母としての自覚(%) 妊婦

	東京	市部	郡部	計	面接
責任感	25.2	28.3	30.8	28.6	16.0
不安	6.1	7.2	7.2	7.1	6.6
緊張感	4.6	3.2	2.8	3.1	16.6
母性愛	8.4	13.5	15.9	13.9	5.7
喜び	13.0	20.6	19.1	19.4	4.7
その他	1.5	0.3	0.4	0.5	6.6
なし	21.4	15.1	12.5	14.9	44.3
無答	19.8	11.8	11.3	12.5	—

延回答数に対する比率

妊娠中には母親としての自覚の感じられない人もかなりいたが子どもが生まれてみて子どもに対して現在どのような感情をもっているかを産婦に質問した。第12表によれば妊娠中よりもっと強く責任感をもつようになり同時に妊娠中には想像できなかった母性愛や喜びを感じるようになってきている。

(5) 生まれる子への期待

妊娠中は抽象的には母性愛や喜びを感じているが、具

第12表 子どもに対する感情(%) 産婦

	東京	市部	郡部	計
責任感	38.8	40.0	39.4	39.4
不安	2.9	2.4	1.7	2.3
緊張感	4.4	2.8	2.7	2.8
母性愛	27.7	28.2	30.8	29.2
喜び	22.6	23.7	23.0	23.2
その他	0.7	0.9	0.5	0.7
無答	2.9	2.0	1.9	2.4

延回答数に対する比率

体的にはこれから生まれてくる子にどのような期待をもっているのだろうか。第13表によれば都鄙の別なく五体満足で健康な子を望んでいる。その他素直、明朗、頭のいい子等を全項目にチェックしている人もあり子どもに対する期待の大きさがうかがえる。またこの度の調査では男の子がほしい人が全地域を通じて14%強あり、妊娠を望んだ理由では後継ぎのためは東京、市部で3%前後、郡部で8.4%であったが無意識のうちに後継ぎのために男の子をほしがっているのかもしれない。

第13表 生まれる子への期待(%)

	東京	市部	郡部	計	面接
五体満足	45.4	46.4	48.6	47.4	35.2
健康	28.6	27.7	26.0	26.9	35.7
素直	5.5	5.6	4.4	5.1	3.1
明朗	4.3	4.3	4.2	4.2	1.5
利口な子	4.6	1.9	2.4	2.3	—
男の子	7.3	7.7	8.6	8.0	6.5
女の子	3.4	5.3	4.9	5.1	8.5
親の性質が遺伝しないこと	0.6	0.4	0.4	0.4	—
その他	0.3	0.3	0.1	0.2	7.0
無答	—	0.4	0.4	0.4	2.5

延回答数に対する比率

(6) 子どもの将来に対する期待

妊娠中は子どもに対する期待は五体満足で健康な子が大きな関心であったが、実際に生まれた子が正常で最低の希望が叶えられた場合将来に対してどのような期待をもつてだろうか。第14表に示した如く健康に育ってほしいとの希望が一番大きい。妊娠中に比べると素直、愛される人、明朗、自立心等精神面性格面に対する希望が強くなってきている。即ち妊娠中は危機感が強いので、子どもはとにかく五体満足で健康であればよいと願っていたので、出産後は気持の余裕もでき色々と理想像を求め

第14表 子どもの将来に対する期待(%)

	東京	市部	郡部	計	面接
健康	33.5	38.4	40.0	38.7	39.7
素直	14.7	16.9	14.7	15.7	3.2
正しい人	5.2	6.6	7.0	6.5	6.4
愛される人	9.4	7.9	9.7	8.9	3.2
明朗	11.0	10.1	10.0	10.1	9.5
活発	4.2	4.2	4.0	4.1	3.2
自立心	12.0	9.3	7.2	8.7	7.9
個性教育	5.8	5.4	4.9	5.2	4.8
その他	2.6	0.4	1.1	0.9	12.7
無答	1.6	0.8	1.4	1.2	9.5

延回答数に対する比率

ている。都鄙別にみるとほとんど同じようであり、自立心のみ都市化するほど多くなり東京は郡部の2倍近くになっていて都会の方が職業生活、社会生活をしていく上で自活が難しいためであろう。

(7) 赤ちゃんに対する愛情は妊娠中に想像していたのと同じですか

この質問は出産後の子どもに対する愛情は妊娠中に想像し抱いていた愛情と同じかどうかをたずねたものである。昨年の面接調査でも「妊娠中はかわいいと思ってはいたが生まれてこないことには実感がわかなかった」「自分の手で抱いてみると本当にかわいい、お腹にいた時とはまるで違う」というように子どもに対する愛情が妊娠中と違ってきているがこの点をたずねてみた。第15表によると「程度が強くなった」即ち母性愛を強く感ずるようになった人が40%以上もある。「質的にも変わった」と分析している人もある。この変化の意識は地域別にみると郡部より東京の方が少しく多くなっている。

(8) 多忙な育児についての考え

子どもに対する愛情が深くなり、かわいいと思っても実際には夜中に起きて授乳をしたり、おむつの洗濯、離乳食等育児にかかる時間も多忙忙しい毎日であるがそれ

第15表 赤ちゃんに対する愛情は妊娠中に想像していたのと同じですか(%) (産婦)

	東京	市部	郡部	計
変らない	32.9	39.9	43.7	41.0
程度が強くなった	42.4	42.3	41.2	41.4
質的にも変わった	15.3	12.6	9.3	11.7
無答	9.4	5.2	5.8	5.0

をどのように感じているか調べたのが第16表である。さすがに「苦痛だ」と答えた人はごく僅かで「母親にな

第16表 夜間の授乳やおむつの洗濯等育児の多忙についてどう思いますか(産婦)

	東京	市部	郡部	計
全く苦にならない	21.1	31.5	44.4	35.7
母親になったのだからやらなければならない	69.4	60.4	48.5	56.5
苦痛になる	2.4	2.1	2.9	2.4
無答	7.1	6.0	4.2	5.4

第17表 子供が生まれてからの生活は(産婦)

	東京	市部	郡部	計
子供の生活が中心	62.4	76.1	84.5	77.5
夫婦の生活が中心	12.9	3.7	3.5	5.1
自分の生活も大切	15.3	12.6	8.1	11.1
無答	9.4	7.6	3.9	6.3

第18表 子どもが生まれてから夫や姑たちに對する感情は変わりましたか(産婦)

	東京	市部	郡部	計
変らない	63.6	68.3	67.8	67.7
夫や姑の言動が理解できるようになった	8.2	10.7	13.4	11.3
かえって自分の意志を強く出すようになった	15.3	13.4	14.8	14.2
無答	12.9	7.6	4.0	6.8

ただのだからやらなければならない」と考えている。「全く苦にならない」という人は郡部に多くなっている。都会の方が家事も合理化しているし、育児用品も豊富で離乳食の缶詰にしても多種類あって簡便になっているが「苦にならない」が都市に少ないのは育児は義務としてやっているのだから郡部の母親の方が母性愛が強いといえよう。また他の場合でもそうであるが、東京の方が感情生活が複雑になり、不平、不満等の感情が多くなっているようである。

(9) 生活の中心

子どもが生まれると今までの生活と異り、子どもの生活のリズムにおとなをあわせていくようになると思われるがその点はどうか。第17表に示すようにやはり「子ども中心」が多くなっている。乳児期の子どもは母親に全面的に依存しているので母親は子どもの生活に合わせることであり、母親の生活は子どもに束縛されているともいえる。このように自分の生活を犠牲にするより夫婦の生活を中心に考えたり自分の生活を乱されな

いようにとの考えは東京に多くなっている。最近母親がレジャーを楽しむのに子どもがいては邪魔だと考える人もいるが、そこまではいかないまでも子どもに明け暮れせず、自分たちの生活を考えていきたいとの考えになってきているのであろう。前項の育児の多忙についての質問が全く苦にならないと答えた人が町村部に多かったことを考え合わせ郡部の母親ほど子どもと密着した生活をしているということができよう。

(10) 家族に対する感情

子どもがいない時はとかく摩擦が多かった姑との人間関係も子どもが生まれてから却って円滑になることもあるし、逆に子どものしつけや育児法について自分の意見を強く主張するようになる場合もある。子どもが生まれてから姑たちのいうことも理解できるようになったと寛容な態度になる場合もある。変化がないのが65%前後あり、夫や姑の言動が理解できるようになった、かえって自分の意志を強く出すようになったがそれぞれ10%前後、15%前後となっている。この調査では対象が核家族が多いためにはっきりした結果が表われてこなかったであろう。

2) 母乳栄養と人工栄養の項目別による比較

最近母乳栄養の必要性が叫ばれていながらも漸次減少し厚生省の昭和35年と43年の比較によれば母乳栄養は生後1か月で昭和35年には市部で63%、郡部で76%であったのが昭和43年にはそれぞれ35%、48%に減少している。逆に人工栄養をみてみると同じ1か月児で昭和35年には市部で12%が43年には27%、郡部においては昭和35年には僅か3%であったのが昭和43年には20%に増加している。このようにわが国では全般的に母乳栄養が減少してきているが松島氏の報告によればアメリカにおいては以前は母乳栄養は社会的低階層に多かったのがその後1957年以後にはむしろ上流階層に多くなってきて社会的階層の高いほど母乳栄養への再認識が高まっている。わが国では母乳は減少の一途を辿っているが松島氏は母乳栄養の減少してきている原因として次の6因子を挙げている。

- 1 妊娠中から母乳で育てようとする意欲の減退
- 2 新生児初期における人工乳の補填
- 3 社会経済的条件
- 4 働らく母親の増大
- 5 乳頭の異常
- 6 美容を目的とした断乳

われわれも母乳分泌にどのような因子が働いているかをみるために、調査対象の中から母乳栄養と人工栄養のものを取り出し各項目毎に検定を行なった。母乳栄養

群は生後3か月以上母乳のみを与えているもの(60例)人工栄養群は生後1か月以内に人工栄養にしたもの(129例)である。

<産婦の年令>

	21才	25才	30才	35才	40才	41才	計
母乳	22	30	8	0	0	0	60
人工	54	51	19	2	1	1	129
$X^2=3.231$							$.70>P>.50$

<学歴>

	中卒	高卒	短大卒	大卒	無答	計
母乳	15	40	0	2	3	60
人工	42	71	9	3	4	129
$X^2=6.456$						$.20>P>.10$

<地域>

	市	町	村	無答	計
母乳	28	26	2	4	60
人工	80	36	0	13	129
$X^2=9.488$					$.025>P>.02$

<家族構成>

	核家族	同居家族	無答	計
母乳	41	18	1	60
人工	91	37	1	129
$X^2=0.355$				$.70>P>.50$

<初産、経産の別>

	初産	経産	無答	計
母乳	28	32		60
人工	61	60	8	129
$X^2=4.112$				$.20>P>.10$

<職業の有無>

	あり	なし	計
母乳	17	43	60
人工	27	102	129
$X^2=1.255$			$.30>P>.20$

<分娩の種類>

	正常分娩	異常分娩	無答	計
母乳	51	8	1	60
人工	106	20	3	129
$X^2=0.249$				$.90>P>.80$

内藤他：新生児の養育の改善に関する研究

<妊娠は当然か>

	はい	いいえ	無答	計
母乳	50	7	3	60
人工	108	17	4	129

$X^2=0.466$.80>P>.70

<妊娠は避けたいか>

	はい	いいえ	無答	計
母乳	11	47	2	60
人工	22	105	2	129

$X^2=0.697$.80>P>.70

<妊娠中の感情>

	責任感	緊張感	母性愛	不安	喜び	反発	その他	計
母乳	27	6	15	18	30	0	0	96
人工	46	9	19	39	60	2	1	176

$X^2=3.524$.80>P>.70

<妊娠中の期待>

	五体満足	健康	素直	明朗	利口	男	女	その他	計
母乳	53	34	5	3	1	13	9	1	119
人工	107	52	2	2	1	19	13	0	196

$X^2=2.446$.975>P>.95

<将来の期待>

	健康	素直	明朗	正しい	愛される	自立	活発	個性の	その他	無答	計
母乳	51	19	15	4	13	10	5	9	2	0	128
人工	99	38	20	17	13	25	8	12	2	1	235

$X^2=8.168$.70>P>.50

<妊娠中の母乳への考え方>

	是非母乳	どちらでもよい	考えてなかった	その他	無答	計
母乳	47	10	1	2	0	60
人工	77	25	18	5	4	129

$X^2=10.369$.50>P>.025

<母乳が出るよう努力したか>

	努力した	少し努力した	成にたりまかせ	その他	無答	計
母乳	36	7	17	0	0	60
人工	59	27	38	4	1	129

$X^2=5.948$.30>P>.20

<あなたの乳児期の栄養法>

	母乳	混合	人工	不明	無答	計
母乳	54	2	2	2	0	60
人工	88	12	16	10	3	129

$X^2=10.743$.05>P>.025

<母親学級>

	参加	不参加	無答	計
母乳	30	29	1	60
人工	52	70	7	129

$X^2=2.524$.30>P>.20

<妊娠中と出産後の愛情の変化>

	変わらない	ある程度強くなった	質的に変った	無答	計
母乳	25	21	11	3	60
人工	51	59	13	6	129

$X^2=3.364$.50>P>.30

<多忙な育児について>

	苦にならぬ	やらねばならない	苦痛	無答	計
母乳	29	29	0	2	60
人工	49	79	4	6	129

$X^2=3.364$.50>P>.30

<生活の中心>

	子供中心	夫婦中心	自分も大切	無答	計
母乳	49	5	5	1	60
人工	101	6	15	7	129

$X^2=2.796$.50>P>.30

<夫姑に対する感情>

	変化なし	言動でうたがひに理る	よった意すな見よった出に	無答	計
母乳	46	5	8	1	60
人工	91	14	15	9	129

$X^2=2.745$.50>P>.30

先ず<産婦の年齢>による比較を行なったが特に差は認められない。

<学歴>でみると短大以上の学歴の高いものに人工栄養が多くなっているが逆に中卒も人工栄養の方に多くなっている有意な差は見出せない。

<地域>では町村に母乳栄養が多く5%以下の危険率で有意差がある。先に述べた厚生省の調査でも市部より郡部の方が母乳栄養が多くなっており都市化するほど人工栄養が多くなっている。

母乳分泌は精神的ストレスがあると出なくなるといわれており核家族ではその点で嫁姑間の人間関係のわずらわしさがなく精神的な安定が得られるはずであるが<家族構成>と母乳栄養とは関係がない。

<初産婦と経産婦>正常分娩と異常分娩の何れも母乳・人工栄養とは無関係である。

働く母親の増加に伴ない人工栄養が増加するのは当然のことであり、たとえ公務員等では生後12か月まで授乳時間が認められていても勤務先と住居が離れていれば昼間は授乳をすることは不可能となる。この度の調査でも勤めがあるのではじめから人工栄養にするつもりの人もあり現在の労働条件ではやむを得ないであろう。しかし<職業の有無>と母乳、人工の関係を見ると有意差は認められなかった。

<妊娠するのは当然だ>と思ったか否か、<妊娠を避けたい>と思ったか否かについても有意差はなかった。

<妊娠中に子どもに対して抱いていた感情>と母乳との関係はなかったが、母乳栄養群の方に母性愛を感じていたものが多く、妊娠中に子どもに反発を感じていた2例は人工栄養群であった。しかし全体としては有意差は認められない。

妊娠中に子どもにどのような<期待>を持っていたか、また出産してから子どもの<将来に対する期待>についても母乳栄養群と人工栄養群に差はなかった。

妊娠中から<母乳栄養にしよう>と思っていたかについては松島氏も指摘しているように5%以下の水準で有意差があった。即ち母乳栄養群は妊娠中から是非母乳で育てたいと考えている人が多く、妊娠中は栄養法について考えていなかったのは人工栄養群に多くなっている。

妊娠中に是非母乳にしたいと考えていても実際に<母乳が分泌するように努力>したかどうかをみると母乳栄養群に<努力した>人が多くなっているが有意差はない。

次ぎに調査対象となった産婦たちの<乳児期の栄養法>をみると母乳栄養群には母乳で育ったものが多く5%以下の有意差があった。母乳で育った人たちは妊娠中から自分も同じように是非母乳で育てたいとごく自然に考えているのではあろうが体質が遺伝すると考えることもできる。松島氏の調査でも母乳栄養群の95.7%が乳児期は母乳で育っており体質と無関係ではないようである。

保健所や病院における妊婦のための母親学級では母乳栄養の必要性を説き母乳分泌を促すような食事や乳房の手当等を教えているがこのような教育の効果が実際の母乳分泌に影響しているかをみたが、<母親学級の参加>不参加と母乳、人工には差がなかった。先に述べた妊娠

中から是非母乳で育てたいと考えていた人は母乳栄養群に多いことを考えあわせ母親学級で十分に母乳への認識を高める必要があるように思われる。

妊娠中と出産後の<愛情の変化>についてみると母乳、人工との間に差はなかった。

<多忙な育児>についての考えも有意差はないが<苦痛になる>は人工栄養群のみに表われていて母乳栄養群の方が母性型といえることができるかもしれない。

子どもが生まれてからの<生活の中心>は両群ともほとんど子ども中心になっている。しかし<自分も大切>と考えている人は人工栄養群にいくらか多くなっている。多忙な育児を苦痛に考えるように子どものためにある程度自分を犠牲にしなければならないことに不満を感じているのであろう。

<夫や姑に対する感情>は両群とも出産前と後とでは変化しない人が多くなっている有意差はない。

以上昨年の面接調査の結果を参考にしながら一つ一つの項目について都鄙の差をみたがどの項目においても大差はみられなかった。テレビ等の普及により都市と農村の生活はそれほど変わりがなくなってきた影響もあり出産前後の妊産婦の考えや感じ方は同じような傾向であるといえる。即ち妊娠に当ってはごく当然のことと受けとっている人が多く、妊娠を避けたいと思っていたのは地域を問わず二割前後でありその理由は初産婦は結婚したばかりだから、経産婦の場合は上の子と年齢が近すぎるためが多くなっている。また子どもに対する期待は妊娠中には五体満足で健康な子どもでさえあれば願っているが、出産後は無事に生まれた子どもをみて気持の余裕もでき精神的健全さへと理想が高くなってくる。

妊娠に気づいた時は喜びと不安の交錯した感情であるが胎動を感じ母としての自覚に目ざめてくると責任感を強く感ずるようになる。都会、特に東京の人は母性愛や喜びは郡部に比べて少なくなっている昨年の面接調査の結果では特にこの傾向は強く喜びよりむしろ母になるとの緊張感を強く感じている。これは素朴な母性愛や単に母となる日を喜ぶよりも現在住んでいる東京の生活は繁多複雑であり、育児に対する不安、学校や職業の選択、交通事故、公害、住宅問題等自分達の生活を振り返り子どもの将来を考えた時に子どもが生まれることを単純に喜ぶことはできないためであろう。

次ぎに母乳栄養と人工栄養を比較してみると以下の三項目に危険率5%以下で有意差がみられたがその他の点では母乳減少の原因となるべきものは見出せなかった。

①地域による差、母乳栄養群は都市よりも郡部に多

内藤他：新生児の養育の改善に関する研究

い。

②妊娠中の母乳への考え方、妊娠中から母乳栄養にしたいと考えているのは母乳栄養群に多く、妊娠中には栄養法については考えていなかったり母乳とミルクでは栄養的には変りがないのでどちらでもよいと考えているのは人工栄養群に多くなっている。

③産婦が自分の乳児期に母乳栄養であったか否かについては乳児期に母乳で育ったのは母乳栄養群が多くなっていた。

今回は質問紙法であるために面接法のように心理の機微は把握できないが現代の妊産婦の傾向はつかむことができたといえよう。しかし誕生をすぎ育児の難しさが加わってくるころの母親たちについてこれを足がかりとして研究をすすめねばならない。

本研究に当り御協力下さった保健所の方々と回答を寄せて下さった多勢の妊産婦の方たちに紙上を借り厚く御礼申し上げます。

文 献

1. 牛島義友・湯川礼子「妊産婦の心理についてのインタビューによる調査」日本総合愛育研究所紀要第7集 昭和47年
2. 牛島義友「家族関係の心理」金子書房 昭和30年
3. 「厚生指標」厚生統計協会 昭和47年
4. 松島富之助「新生児退院指導方式が児と母に及ぼす影響—母乳栄養の減少傾向とその背景に対する文献的考察」日本総合愛育研究所紀要第7集 昭和47年

妊 産 婦 の 心 理 に 関 する 調 査 (妊婦用)

氏 名 生年月日 昭和 年 月 日 才
住 所
あなたの職業 記入月日 昭和 年 月 日
あなたの最終学歴 中学 高校 短大 大学
家 族 現在一緒に住んでいる方を書いて下さい

続 柄	性 別	年 令	職 業
夫	男 女	才	
	男 女	才	
	男 女	才	
	男 女	才	
	男 女	才	

この調査は個人的に取りあげることはありません。またどの答が良いとか悪いというものではありませんので卒直に記入して下さい。該当するものに○印をして下さい。又は空欄に記入して下さい。

1. 結婚なさったのはいつですか 昭和 年 月 日
2. 予定日はいつですか 昭和 年 月 日
3. いま妊娠何か月ですか か月
4. いままで死産、流産、中絶したことがありますか
ない ある (死産 流産 中絶 生後死亡)
5. 今度の妊娠は何回目ですか 回目
6. 妊娠するのは当然だと思っていましたか
はい いいえ 理由 { イ 長い間できなかったから □ 受胎調節していた
ハ その他 ()

- 48 -

内藤他：新生児の養育の改善に関する研究

20. 赤ちゃんが生まれたら母乳で育てようと思いますか

- イ 是非母乳で育てたい ロ 母乳でもミルクでも栄養は同じだからどちらでもよいと思う
ハ 考えていない ニ その他（ ）

以下の質問は妊娠2回目以上の方だけ答えて下さい

21. つわりは前の妊娠の時に比べていかがですか

- イ 前回と同じ ロ 今度の方が軽い ハ 前の方が軽かった

22. 母親としての自覚は前の時に比べていかがですか

- イ 前回と同じ ロ 今度の方が強く感ずる ハ 前の方が強く感じた

23. お産に対して、前の時に比べていかがですか

- イ 前と同じ ロ 経験があるので安心してゐる ハ かえって不安が強くなった

24. 前のお産は正常分娩でしたか

- 正 常 帝王切開 鉗 子 吸 引 その他

妊 産 婦 の 心 理 に 関 する 調 査（産婦用）

氏 名 生年月日 昭和 年 月 日 才

住 所

あなたの職業 記入月日 昭和 年 月 日

あなたの最終学歴 中学 高校 短大 大学

家 族 現在一緒に住んでいる方を書いて下さい。

続 柄	性 別	年 令	職 業
夫	男 女	才	
	男 女	才	
	男 女	才	
	男 女	才	

この調査は個人的に取りあげることはありません。また、どの答が良いとか悪いというものではありませんので卒直に記入して下さい。該当するものに○印をつけて下さい、又は空欄に記入して下さい。

1. 結婚なさったのはいつですか 昭和 年 月 日

2. 分娩予定日はいつでしたか 昭和 年 月 日

3. お産はいつでしたか 昭和 年 月 日

4. お産は正常分娩でしたか

- イ 正 常 ロ 帝王切開 ハ 吸 引 ニ 鉗 子
ホ その他（ ）

5. 今までに死産、流産、中絶したことがありますか

- 無 有（死 産 流 産 中 絶 生後死亡）

- 50 —

内藤他：新生児の養育の改善に関する研究

- ヘ 自立心 ト 活 発 チ 個性をのばす リ その他 ()
21. 赤ちゃんに対する愛情は妊娠中に想像していたのと同じですか
イ 変らない
ロ 質的には変らないが程度が強くなった
ハ 質的にも変った
22. 夜間の授乳やおむつの洗濯等育児の多忙についてどう思いますか
イ 全く苦にならない
ロ 母親になったのだからやらなければならない
ハ 苦痛になる
23. 子供が生まれてからの生活は
イ 子どもの生活が中心になるのが当然
ロ 夫婦の生活が中心
ハ 自分の生活も大切
24. 子供が生まれてから、夫や姑たちに対する感情が変りましたか
イ 別に変化はない
ニ 夫や姑の言葉や行動が理解できるようになった
ハ かえて自分の意見や意志を強く出すようになった
25. 妊娠中に病院、保健所の母親学級等に参加したことがありますか
有 無
26. 母親になった感想、その他何でも自由にお書き下さい

Investigation by Questionnaire Method into Psychology of Expectant Women and Mothers with New-born Babies

Dept. 8 Yoshitomo Ushijima
Reiko Yukawa

In order to find out through what process mothers come to have clear consciousness of motherhood, we made out questionnaire items based on our last investigation by interview. The questionnaire forms were distributed to some expectant women and mother with new-born babies to have them fill in the forms through 19 health centers, and 1,789 replies were obtained. The result showed that there wasn't a great difference between the mothers in the cities and those in the rural districts. Some differences, however, were observed in the following points:

1) As for the feelings during pregnancy, the women living in the cities showed stronger feelings of anxiety and tension. Probably, they can't simply feel happy when they look round their complex city lives.

2) In the cities there were more mothers whose affections toward their children changed also in quality before and after birth. The mothers in the cities who couldn't even feel the pleasure and maternal affection because of the anxiety and tension during pregnancy come to have the affection which they couldn't imagine during pregnancy when they actually hold their babies in their arms.

3) In the rural districts we found more mothers who led their lives after delivery focusing their attentions on their children, and more mothers who didn't feel it painful to have their hands full for bringing up their children. We may say the mothers in the rural districts are more closely attached to their children.

Then, we studied the differences between the breast-feeding group and the bottle-feeding group checking each of the questionnaire items:

1) More cases of breast-feeding were found in towns and villages, and a regional difference was observed.

2) More mothers who wanted to breast-feed their babies from the period of pregnancy were found in the breast-feeding group.

3) We found more mothers who themselves had been breast-fed while they were babies in the breast-feeding group: Significant difference was found.